
『レ』はツンデレの『レ』

高浜ゆりえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『『レーヴ』はシンデレラの『レ』』

【著者名】

Z9927A

【作者名】
高浜ゆりえ

【あらすじ】

シンデレ短編小説です。シンデレってなに?...といつ問い合わせに対する一つの解答としての作品です。シンの道を行き、『レ』を同る少女のお話。

「僕の後輩（ ）は、何かにつけて僕につつかつてくる。

シコ目でショートヘア、僕の前だとこつもへの字口。

廊下とかですれ違つても。

「先輩、ちょっと邪魔です」

いつもこんな調子だ。

だから僕も。

「あ～ははは、どうもすよ

こんな調子だ。

しかし、流石この前はキレたよ。

放課後の校庭で足掛けされたから。

「つひ…… てえなオイ！」

「ケて立ち上がった僕は思わず叫びましたよ。

「なんなんだよーなんか俺に言いたいことがあるなら言えばいいだろー！」

叫び終わったら、後輩は俯いて泣いていた。

「…それが…」

後輩は僕の視線を感じるとすぐに背を向けたから、それ以降はどんな顔をしていったからわからないけど。

「……それが言えたら…」こんなことしませんよー。」

後輩の涙は、僕の脳裏に焼き付いて。

なんだか悲しい気持ちになつた。

「……ヒハ…ヒアエズ、使えよ」

後輩の気持ちがよくわからなかつたから、とりあえず後輩の正面に回つてハンカチを渡したら。

「…………ヒハゼコモト…」

最初はよく聞き取れなかつたけど、お礼の言葉だつたみたいだ。

「……先輩……」

後輩は涙を拭いて、濡れたハンカチを見つめた。

「先輩はどうして、こんなに絡んでくるつたりこの後輩に…そんなことをしてくれるんですか？」

私は少し考えこんで、後輩に背を向けた。

正面に向いて言つこは、少し恥ずかしかった。

「お前さ…俺に絡んでくること以外は、普通に 真面目でいい奴だ
うへ。」

背後の後輩は、驚いていたみたいだった。

「…そんな…」

僕は、構わず続けた。

「文化祭とか、学級委員とか…正直、俺なんかよりよっぽど色々なことをこなしてるだろ？」「…」

振り返つて、驚いて瞳を見開いている後輩を見つめた。
僕は、苦笑いをしてみた。

「だからさ…ストレスがたまつて 僕にやつちまつてんのかなって
思うと… 仕方ないなって 気がすんだよ」

僕はそう考えていた、だから嘘じやない。

後輩は確かに僕より仕事をしてるから仕方ないと思つていた…

「…違つ…！」

後輩はそれを聞くと、更に驚いて…戸惑つてているみたいだった。

「……違います…」

後輩は、ハンカチを両手で抱えて赤面した。
そして、意を決したかのように言つたんだ。

「……私が……先輩に……絡むのは……『気』になるからです」

「？」と口を開けてしまった。

「……先輩が……『気』になるからですよ。」

『氣になる』……とこいつ言葉の意味は、僕でも分かっているが。

「…………え…………？」

一応、念押しをしてみた。

「……それって……」

後輩は赤面しながら私に迫った。
その間 60cmくらい、多分。

「先輩が気になるから……先輩が他の子と楽しそうに喋っていたか
ら……嫌だった！」

後輩は、意を決したかのようにハンカチを僕に差し出した。

「……」

ハンカチを渡す後輩の手を、僕は握った。

「 ? ! … 先輩つ？」

僕にとつては初めてだ、フォーグダンス以外で女の子を握るのは。

「 … なつ … なんでツ ! ?」

後輩はツリ目氣味の瞳を大きく見開いて驚いていた。

僕も大胆な自分に驚いていた。

「俺 そんな風に女の子から好かれたことなかつたから…」

僕は、自分でも知らないうちに素直になれない不器用な彼女に惹か

れていたみたいだ。

「嬉しいよ…友達から 始めないか？」

その言葉を聞いた後輩は再び泣いていたが、僕の顔を真っ直ぐに見つめていた。

「……はいっ……」

僕は、俯き気味で歩き出した後輩の横に立った。

「でも、もう蹴らないでくれよ……これ以上蹴られたら俺……マジになっちゃうからな」

私は苦笑いしながら、彼女に念押しした。
いぐり愛情の裏返しとはいえ、痛いのは嫌だから。

「はい……もつしません……先輩に……嫌われたくないから……」

彼女は僕のスポーツバックの端をつまむと摘むと、僕と歩幅を合わせて歩き出した。

夕日の校庭。

振り向いた横顔、僕の宝物に。

「…………」

僕は、息を呑んだ。

一瞬が、永遠になる。

「……だから先輩……よろしく お願ひします」

これからは学校生活が、楽しくなりそうだ。

「…………おお、よひこへ」

不器用な笑顔が、かわいいよ。

いねからせ.. よみこへ

【おまナ】

僕と彼女が一緒に帰れる道のりは短いから、僕と彼女は公園に寄つていいくことにした。

「結構……」うつ子供っぽいのもいいですね

僕達は「ブランコ」に乗っていた。

「そ、そういう…え…ばさ…角手は…」

話かけようとした僕を、彼女は遮った。

「…先輩…名前で呼んで下さい」

彼女…角手の名前は玲奈だった…

「…そりや…うだよな…」

確かに親密になりたいなら名前で呼んだ方が自然だった。

「玲菜はさ…自分のことを『僕』っていう男を…どう思つ?」

名前を呼ばれて口元が弛んだ玲菜は、少し考えているようだった。
そして、ブランコから降りて手すりに腰掛けた。

「…先輩つて…自分のこと『僕』っていうんですか?」

……
団星だった。

僕の一人称は家族の間ではまだ

「僕」

だが、学校などでは

「俺」

だった。

因みに学校でも、慌てたりすると

「僕」

と言ってしまうが。

「……」

だつて……背伸びしたい年頃なんだモンーー！

とこう苦しくてわけの分からぬ弁解を、僕は心の中でしていた。

慌てながら、僕はブランコに座った。

「……そ…………うだよ」

僕は赤くなつて俯いた。

何気に、恥ずかしいカミングアウトであった。

「……」

玲菜は手すりから離れて僕に近づく。…僕は彼女にどう受け止めら
れているか心配であつた

「先輩……気にしないでください」

「

玲菜の顔が、僕に近づく。

彼女のツリ目は、近くで見ると…吸い込まれそうな輝きを放つて、いるようにも見えた。

「…『僕』でも『俺』でも…先輩は先輩です

じんわりと彼女の言葉が僕の心を打つ。

「私の…おな先輩です」

彼女は赤面しながら、僕の耳元で呟いた。

凄く小さい声でよく聞き取れなかつたけど…

…何て言ったか 僕には分かつた

「…ありがと…」

「さて、帰ろうか」

彼女がすっかり赤くなつて僕から離れると、僕は立ち上がつた。

僕は歩き出した。

「はい 先輩」

彼女と一緒に。

家までの短い道のりだけど、明日また会えるから。

これから本当によろしく。

(後書き)

最後まで読んでいただき、どうもありがとうございました。

「いんなんシントレじゅねえぞー…」

「…いりせ…いりつた方が…」

といった感じの感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9927a/>

『レ』はツンデレの『レ』

2010年10月8日22時09分発行